俳諧文庫 五十八

50

和漢連寿帖

寸

へ 5
1139
50

遠州佐屋之記

師恩許海窓にあるに
折ふしれ涼ありて寸志の
芝尾と挿く　守林

ことよ涼しく月よ夕向れ七瀬貝
那山れ錦海紀の時　宗湖

50

ヘ5
1139
50

玉の軸調ふ秘書の旅支く　吟山
肩もくと辞も無なり　竹翁
書附の入る結納の一たらく　巨燈
水仙の香の取く洞庭　林
徒に茶谷とすれは渺うし　潮
霞をおりてわかく海風　山
咋くとれのしかぶせ川俵島　翁
徒に鳥のせまる拐文拐紗　枕

孟宗盆も子代に於て哀なし　林
柴の憐し荷に蔦て朽月　湖
鶉帰く短い袖も恋たるや　山
氷くさんにて白味噌に塩　翁
花ハ香に百双倍の廊下まて　枕
東風にわるく天地の恩　筆

遠州見附之部

吐故庵
羽人

満月のわきてやうさけ之月の里　一嘯

神楠へと見ゆり松川雛鶏　桃仙

草は彭野馬も千葉に萱の里　松花

笑はの風に袖夜ハく　知足

三人で五十（イソジ）にあまるもちつき　知足

鶏も舞もして八瀬路　鯉江

蝉捲るまる之斗九日本晴　蘭島

あやま芝居の旅する　益長

同　菊後

塩の市とはなると云ふ新の色　芝蘭

月の露は住吉わたりは原　芝蘭

亀山の上に酒の色姿まく　對年

油きらひの髪清きなり　荻洲

未待バかり言も涼しき露貴ら　連波

潮よ湿る橋の婦人殿　好琴

物子の夢人も文月訪しき女　獅州

木枕よもく宗かしびきるま　歌菱

誰ごゝろく肝にふかき境の夢　亡人　風士

是ハ七月大祥よわたれ九日悼こゝかし、ねむなりさうと悟となく承下よ傳しみと世界てハ深きうらくの演門いでぐわきのまさりぬる今よる七回の攝策よなしとなして追加すりと生前の竊りしとまてひ段落形従名とこゑよ隠しきとや

覚えても夢此尾の表現竿　掾人

白しろりと八月の吉い従州まて　蓋後

しくおし部し覇王樹(サチラウツホウ)　立

今花猶の象よ求る附ハ川　人

仰可かしさよ曲ふ山越へ　立

偖久しく風白地紙の便り　後

よ斧づくれ墨にすゞ　立

出もせぬ御藤の恋の古竈　人

弁部つゑば江戸も恐し　立

下り米所くがおゆみ町　後

まづき附田よ秋の末びて　立

月の眉仔打ゝ私曲子洗濯屋　人

七夕祝よすまれ掟(タンダク)　立

舌なみぬ雛のをと音れ侭のくと　後

辛満の土れ洗良をと掛れ　立

花の旅程蓮こくよ云りとや　人

後ハ去殺れ酒よ竹解　立

乙鳥も生ずる矢数れりとすゝ　後

荷ふて通る麦の旅風　主
打つまの子供ハ口論すなくは　人
すゞき溜ハどの所張紙　主
雅ヶ谷を翻訳する新聞紙　後
実の芸のかはすれありき　主
文字の継ども女子ハ継つゞき　人
月暗の寄の二十に七字　主
新文の松竹しこ歌合講　後

唐もまらぬ梅白のあまあり　主
三日月も拝みて井よ鄰在　人
又振袖しハ富士をも三日夢　主
契りを重ねしまゝに浮世川　後
二十八宿の中の世の後　主
名にし似ぬ小車吹の柳かな　人
東任ての太刀りかゝる絵　主
言葉の圃如集よ始るも紀　後

もゝ鳥の西を招しけん　意兆

奥州衆之上に寄

海すみのしの坂ちりて
此は會をうつしむ　等舟

影を汲千鳥の奥の月夜かな　文松

寄せけれは末の紫草の葉　双流

草枕の宣肩に手をとりきはつらん　奇水

袂ちる桂に古宮まてかはと

大空を屋根にあはせて談合す　渭舟

町は藤枝の葉陰なり　嘉岑

たぬきとてもむしのむれの世の変　之松

信濃無の鴻るきまゝ　舟

如月鳴ぬもを発止なし　水

きのふけの淵はたゝの新田　流

切り捨て見ゆる小松の表かな　岑

掛(クハ)薦(ラ)らもち生しけりつたの踏墓　渭

月の秋ナ風に劍まで立ちあれし　舟
神楽歌うむしの音楽　杠
定家の機嫌見払ふに七まかり　流
舟衣武者一隊[illegible]し　水
今朝のきの[illegible]花のおしさとも　渭
二月廿日西風さつ移る　岑
隆治ちる富士の岩隈あるる　杠
清かる蓋のくもれ新きさ　舟

秋くのしくは蝸のこひさし　水
手[illegible]吹涼[illegible]涼風ゆるし　流
蝸蝸も曲ものとり[illegible]　岑
文字の塔の[illegible]かきまる　渭
白[illegible]に[illegible]揚[illegible]大根　舟
進つば鶯の[illegible]石　杠
青れ月川[illegible]を[illegible]流　流
浩してそみハ柳る帰し[illegible]　水

おもしろき庭の花の咲加減　渭

ゆふしくれ雨の二ッ二咲　岑

沙汰の又麦や芝居もちかけは　松

咲くに恵せぬ鷹の境内　舟

宝掛に出る鶴の白い古谷に経て　水

迷ひはちるも貧折しく　流

京洛の花ハ茶店に錦りたせたく　岑

十方に花の暮れ年　渭

尾州犬山之部

一風の声なきや盃の露　宗匠 龍卜

むしろみゆる月のま昼中　馬風

振袖のもよし花の粧ひて　尤天

双六の目の数ひまばゆく　大車

座禅石今ハあちらのすみ屋　九笹
真を楽屋に柳子舞の留　槐之
開帳の出し殺すれしや　揚大
拍して下ル人死れ縁　琴流
手川と號す橘夜の巻奇待　自川
寝ぬかるまじれ白まく　桃笋

斧門
正直り壺九八重葉れ白さかね
入ととし錦の定居湖月　好嵐
酒香ぬ韻余所ゟハ耕さびく　大車
葬堂仕立へハ海花さへ予尋　湖千
何息く綾ん手れ月の衛をとゑ　巴十
虎れしほ子ゟ人ハまと　雨六
兎みさん夜没をとりく咲らん　馬風

誘ひ入遊ともしれ彼従　周和

咲残るつきもしる山さくら　琴流

わけ入の志水硯てまてる　桃筝

無名杉のさやくも起川月の秋　馬流

滑りぬ寿を硯すつむし　菜陸

比丸もきのこも生る林かく　九笹

剥いて無のさえる炮烙　撹之

並所へハ婦着て芝る婦娘　自川

宗よ不思議の祈る此地の國　大車

手まで姓へさ祚のまよ雲深ゝ猿　波暁

きのうれ足の冥ゞと春く　洪菓

花法よふ枝の香氏の綵慎よ　左天

文ととうりよ乾ゝ井の嵩　桃筝

名月や辛崎にちかくれ絲 雨六

地清の山を巻て鳴鹿 馬英

蔦は不動の堺にちかく 和超

勅使のわたし年を採花 石脂

孝行の鳴ぬる家の路 山羽

風をおどして布さらし川 鯨郡

ゆすと餅に熊れたをぐる男苑 巴州

菱垣におる新令の箋 花頂

孫高き萬九臺の七ちかり 周和

春風に虎(ご)れ壒(さう)路(らう) 桃笛

生塚のわたりたづねに菜話り 巴十

一天まく月の浅芽生 琴流

言厳に角力参せられ勅とりて 自川

伽羅を焚山髪にハわる程ど　揚大

味噌汁を吸だうる鍛の舎　尤天

月の名残を乙の朔日　茶陸

おやまくま笠の太鼓もる船で　巾水

志ばしとのとしハ紀潟ぬる　龍卜

文豪ま寄る呉山の花むしろ　波暁

風雅わりて蝶の菜の札　桃筆

攪之

満月の照とすてや二見がた

曼文ハもひこる千なりの瓢　芥川

鶉なく祖師の大唱文続く　湖千

屋根ふく世話ハ寄ま酒精　巾水

三味線のなぢら節こ替りまり　鉄菓

湯女が砂する湯わりの酒　波暁

霜枯に入ぐ余情な千代流　冠嚴

無月のまゝ汰萩いくつ径　九巷

天が下ころの花に咲花も　楊大

新の織を揺れ抜出来　桃筆

伽羅着ても粧ひとかはらぬ花すゝき　鉄三

文銭の莚に寄るも夕月　龍卜

形見の文の別れを偽風に合点して　琴流

常にまわる筏のかざしく　巴十

郭公涼み矢数の転おとし　茶陸

太刀の尾ちぎて竜虎戦ふ　自川

紅侍鶴をとすぐハ花が芽の清　湖千

座をもつけば◯了行脚　車雷

誂へもに来る名物の松貝　谷川

笠頭を遠く手許乃疫　桃筆

松濤舎 琴流

木犀の香や文臺の香ニ燒　馬嵐

微(ミ)笑(せう)に移る萩の風　谷川

月の照閂(り)川の臭杙ごしせく　九天

麻くゞみ飛る牛の尾荒　龍卞

代猎を依佗にしるす長者号　琴流

大丈人の志らぬ框(カシキ)　馬嵐

立縋も勢しに出居東加州

帰りてハ志らず竃ハ蝙蝠　川

昔せはに又やうふ木の芝の字　天

下向ハ恋の俗ハぬぐへく　卞

大名ハ衣服裁くむくしげ　流

痴ましすふ仲しくの谷　嵐

鄙ごとの柳をしるす翁の月　川

西風ならいて帝韻の経　天

秋風によしハる扉の軋　卞

今きえて遠く二の丸の椎　流

子規の花ハ嵐のわたしもどれ　嵐

海士らもすて自ちかり苫　川

出代りは武家をいやがる介錯　天

七合入ば七盃のささ　卜

貴経を紙居て辛江戸の文　流

焼取の木を借りうけ　嵐

諸とも山路に猿の手綱して　川

おもひてはさきは若い卒とも　天

道心のわけしも学文好より　卜

夜もすがらの雨に菓の露上　流

隣り茶摘みの桶名を聞き　嵐

余波（ナコリ）の関の終の竹を見　川

芸の月花につけて祖霊の命　天

身の為に何しに婚しの雪　卜

在家を嗅ぎてし葬の者の為　流

ゆさくし文の堂上守氏公家衆　嵐

狐格くらくてハ頭痛かなりかり　川

あつくてまる舞子の須又　天

拷しの舞をまさきあ花又　ト

別さし俳諧わつく冷月　桃年

勢州四日市之部

先師の七回忌を此月は営ま

見て揺ぎる与の七百臭

を織ゆ七の花をささぎ

去れもしれしとおもえと

千世と慕ふのおもひなる

なし　杉天斉

周竹

月やわら海を隔てて遥去現

云花柳よ咲く舟のこゝろ　境川

八重垣の内うし営の音を分けて　銀篇

今のちるこハ誰が為れ袖　千交
若かん鬼瘦の欠をづしく　千瓢
吠をうとして活ふる石　里川
紅粉の遊局をとくる凡涼し　芦舟
疱瘡二ツ三ツ舞の夕色　桃翠

活味舎　真六友

むしの音と蒲萄葉や塚のうへ
芳しれ名の鳴草の花　周行
翁の月七旅れ笠を手に挽て　芦舟
旋のわらは活けた木の尾　里川
于鞄の場しくを凡の是くらし　根浦
枝本町まつづく本地所　千翁
大そもぬりるげち揃み雨　瑞川
名酒のてまハ白ふらと梅　桃翠
七千れ寂や石碑るわきれ塞

此君亭　里川

不易の月は未来まで照　千交

訛りても歌ハ宗祇なる教まて　塊別

彼発心すゝんを京へすゝめ　千瓢

笠無垢の蛭に日数をとゝのへて　芦舟

捨ままほひける新した　狼翁

東舟ゆしすゝへる四ツま蔦菜飛　周行

苦頭打しむゝ蛭しめゝる声　瓢牟

長別容
千瓢

置露や庭ゐしゝ花まてまつる　里川

打まの打さまる風の月代　周行

こぬうくハ熟せすいさと擣て　狼翁

瑠りが兀くやすき一むし　塊別

奴云れ乞目を呼ふまゆらし　芦舟

水術のせゝくえし　楠

筌根子薪の山をとゑゝゝまく　千交

根深の香ほり香らの上へ行　魏牟

南指図

猨賓

子星の外今ハ月照し松風ぞ　千瓢

掛山から織る根敷の庭

関守も暇に八方へ忍び明く　千交

春まくらくて八下に相奏や　芝舟

細とのくほときくへしをきのむり　周行

鈴てこ振る云舞の猿　塘川

給よ孫をもてなし此ね扱る　里川

扱ケても花の渡てえぎく　魏牟

大江舟

芝舟

星祭の香八隠まずも雲の葉　猨賓

啼ぬ席きく月の和れ人

上下の屋敷に新や打ちそん　里川

まさこつまみ鍋鏡の糯　塊列

大工飯治近すに同の身ハよし　文交

今の内纔ハ口惜しでもし　周行

七杖をきもて〇て〇のさゝげとの　文交

消而もいさく山のむしさき　雛笑

年を迎て国の宝や轄ゆく

吟眼閣
塊列

すゞしさや庭の石に照る月　芳舟

荒鷲の下宿に近よりすなよ　千瓢

大織をと磨きしてさへ　周行

夜竹の中に篠目を吹きかけて　里川

天ゆかしくは横笛て降　文交

春にめでし薪の肩も霞る床　浪翁

又味よきつきて柄子（フラスコ）の中　雛笑

老耄の記に入て近の句帖と
まうしきぬけ年回ハ師走の
忘れがたくかきて追福とする
たよ也

訓露舎
丁濡

噂りて居るまに眠り声なき秋の蝶

風の手鏑として居れ村芝

移ろ子の精ハ名月に記しめたて

切目より杣のさえる蕗立

あつくのやら古家と帝皆
忌れゑ打扇にさり仰

追悼

七つせの浪ハ海の月めぐり　仙史

名也を隠して御ゆかりの紅葉哉　桂可

年しまうて老ける栄の花　丁毫

七迦り月とも照らし白鳥　俊和

月空に居た先生や七々世の
法りしやうの広寺の音に
ちへてせよ笑へりとハ

秋の居の市に月の新家所　虹栖舎　二川

北伊勢三重之部

見えつる姿なし萬の后　一許

月にたゞしぬる松しまの気　彫町

晴やわする京都かう秋間く　関蓬

わすれさる寺の菩薩や　遊外

象ハ事の中くの居か暮う　餘階

天津風うら吟物ハ淋しき　秋洞

七夕の花とく文に文をよし　丙生

南もしに飛ぶ蕎麦し大形き　羅苑

月にわするゝ半里の京や土佐の玉　彫町

登りの様な月のかゝ雲了　蓮外

湾泊曝編子の筆の薪寒して　園竜

伽羅の匂ひに消えし蛙　雨星

西風をとへ遊で[illegible]の五月雨　秋蓮

萬石の出仕頭六行の積　鷄階

松が端のぼき春のめぐるの花ざかり　一計

衣の袖にかゝる糸ゆき　耿洞

此悼述京此所に出る

三河岡崎之部

ちょび来る澗ぞうし松露の香　大海道　象計

焼香と包みし袖の露時雨　鷄呂

蜻蛉帰や棲の一トつ○　霞丈

月に月に白子影や澗の氷　槐川

入る月の名に匂ひそう露の紋　岱竜

尾州佐屋之部

水くきの残る百代やとし舞　栢意

深文のさとに咲や蓮の花　卜之

けさまでしぐれの庭八重しだれ桜の月　杏詞

名月の所新や末の国までを　曾推

松かり出まで桜の花の名残哉　攬枝

越後高田之部

尾張の老師世を辞して
すでに七周経光にあかく
照しけり　如雲

七度の旅をとり逢こともの月　落遊

行まるの草に露の満遍　花京

下明る事は志弱し鶏に飛せて

人柄にむかしの若斎　素丁

白わり涼へもわる京さんや　杉京

世話しうるやう咲て文蒙　左江

見ともや八十の仮の粉しあき　胡交

是れの悲さと熱さとお訓　香卜

本復の附に幸し紗志くし　調圃

一句を乞り書れ短冊　泉尼

平生の好きと忌日の手向華　千舟

庭作薫する梅の白毫　晩翠

江州大津之部

負月翁

白菊や立出て郷し月ハ流石

まや好風にまるるゝちる肘　可明

粋衣に葉大夏を見て月見て　佗北

見とりてハ又山する見とす　杉卜

新衣の成る中なり何の香か　文甫

それ耳ことを知て辭し鳥　世里

ころしれ秘事を探ま表紙　芝庭

むかしも代ゝるまゝ色れ谷　素白

竹隈も心よりすゞ年寄りて　巨舟

あせたる虫の帰すいろも　其尚

月に辞倣やるや舟なころみ　五畦

窓れとつゝしむ崖の雪角子　倚山

康ちし逝てころふ京れく　尾仙

治難に家とうかれ出しれ　古渓

此夜香るゝ何所よ口切の蔵より　咲人

峰へと蕎のわれやそて返り　馮得

こ鳩にむかし妙す花の中　巨俊

家どもやいるや雛の心くばり　呑路

かどつめたる海山の春れ文　明

延齢丹をかそく市翁　月

こ入のらよき蔵す夕化粧　卜

みなと迄西瓜畠の数　北

亭主ハ市中にありて寂や運　里

すゞ白露ハおりき空との　甫

涼しさハ衾のもる露の篇　白

子鷄まゝし月暁らも来る　庵

出来てくる継くつれぬ所芒花　尚

めをふるもの文ハむつきり　舟

蛭蚫(ヒラムシ)の消ゆる頃に二日月　山

此頃の春なりき勤かく　瑳

わすれし笠く盡する躑躅かも　汶

麦ふり笛に合ル中君　仙

たゆたふの風奏る終く鉢系　谿

虹をとして出れ山後の池　候

音もて花に桑麻惜ぐぬて　得

うきり鉋くハ風中も懸く　人

江州粟津之記

先師月忌ハ居士の七廻忌名前の
宗匠より備ふる迄ハ此地にも
除生下の三日に清遊の元匠
香花を捧りて五句の一巻なし
侍りて而已

湖山の六たびとも新や枕の月　滄浪居 文泉

迎ふ田螺の尻もとき通　可風
千軒の庭流まゝに桃咲く　汀雨
糊責声の音にまつむく　湖声
請秋のゆふハまねとて小霧待　雅遊
形ぎ寒みるのハいつの塩物　糸竹
とりなで二ぬ葉ふハ二る尾二号院　梅笑
木　住人ともりの君ハ秘宝座　庵湖
居ば八ツ幕堂く涼とある華　掉歌

ちかづくも見えも遊ぶわ若の路　芳菊

日は入りを追ふまゝの蟬も遠ゆかき　柏舟

隠居寺のあてなるけの石階　洞雲

白露のかゝりし春秋盤の桂なし　楓

茸狩と海を眺くや月　画

うれしさに雲しの日のまへる　竹

足拾ふ所をも掃除する　素

何ことくと一夜の花の雨かかり　声

清ちかく代々岸の糸柳　莚

菜畠屋の前に蓬々とかゞやきし　湖

二つ子の母の中ゆきちらつき渡　笑

いつとても仕出のつめる仏讃　菊

竜の暮浮雲がもとも静まる　歌

待侘てつまの古歌を読出し　之

無業の總身の跡つき　舟

寒さのこわさも泪の水にせケ　画

そのあとと見てさうなる宗遠　竹
荒社なうし備ふ三寸徳利　笑
儀にかはく所新郷の出来　風
こゝろ静に晦の月夜の秋とこそ　湖
漕ぎしをりてハ露の玉遠く　声
冨山の芳野の雅をなりけり　舟
明るさ大徳に誠もわすらぬ　言
雛けの鶴あんきんのこゝ春也　素

寝はしかりれの文してとの　棠
咲度にさまよ鳩の名行観　莚
醍醐の稲活を探ぬ石臺　歌

越ノ
在列　高田之社

七むへの金席に
めしをれよふ　千木園
花北

今も稍（ヤ）濃くやさしくれ
なつきの風の来たる悲　十也

杉垣地中に柳ハしりきて　石芝
さくハ花問さが膝の上書　梅五土
契し宗に汁をとすゝく雨の音　亮程
水の宝のきる〇とさと山の畠　止三
活衣まく之廻り濡て香の匂ひ　東籬
廓く折りて向の結納　北
名のうし側れり緩所か暁ま生　也
白地丸ゝ梅のさぬ卯の花　芝

法問に射ル矢も折く侍る前　玉
世よ吹きとてもおそろへぬ猿　移
湖を象と夕顔のいまり子〇　之
なとくなる程卯子三日月　籬
旗れのき流石いをどんおそれれ　北
師ましよ多れ猿あ乃せ松　也
幼も今眼前よ兄ての方れ花　芝
唐物しせくく角仕也之廉　玉

まじハりし遊に仮の蝶つがひ
殊泣を己の愛れにまて
世ぢよりハおもきを元の汗獄
京宮廃室の息を吸
三文で合力ハまいらせり
藕れ志侍れども雖いはの扇
嫁様に教の孫しくりきて
ありし床しき速記きの琴

雑 之 部 北 也 芝 以 部

今日此月家京語し浣翁の奥
菜如しきれに深きに也し
是らくの信おふれたびしけれ
喜りメて旅の筆れ戸
花の家忘れさやうに入梅の比
從きに乾菫の巣に積ふ
巣が驚て齢と去りきはく
ほうりに飽ぬまでれ飲食

之 雑 北 也 芝 之 部 雑

かきつばた挿て今の花　　宜

葱の数のましてきさらぎ　　笨

庵総之部

月影を波に遊ばする清水　　杉吟

こびり付りし瓢(センナリ)の夏　　白扇

竹の長き髪の末結出して　　半十

抱て寝ではれし蚕の栗　　越竹

後追を杖に拂ふの綾の坂　　吐

菜に無て瀬の割く小溝哉　　不木

大(イカ)名の細は粧ふもじりて　　銀和

階ヶ篭くのあは鳥　　吟

咲花の附蕎ふの方の床て　　扇

飽ぬ出しも氷北りのわし　　笨

奥州保原之部

投句白園 亀六

象山に月やとまる瀧の沫

眼にうつる色る行夏の燈 呂角

扇の香語ちる山としら箒わしらで 二川

むしはるまゐ弟帯こやうする 掛田 仙舟

陸よ車として八海の志らまく 同 流之

石大矢声に若れむす香 同 野舌

多勢まくえ花の京園に久しきと 同 桃村

天にハヽのう蔭地にハ 蔦 笛

同 福嶋之部

月やわかぬれに思ひつまかさみ 菊舟

峯に走舟漕行て軸との 湖之上 等舟

年寄ぬ茶と妹とあまへ　三岳

酒とら湯に伴ひもし蕨　筑州 志香

雨に翁マ雨に咲る花久し　同上 嘉参

長柄しまじて西瓜の雪　同 双流

江州金堂仮住

都の蚊は夢も伴ひの折から　一葦斎 歌月

ちらりと深る草の花共　知水

鹿の月見様二夜に揃ふして　芝露

保よ多の月ちゃ帰く見ば　月

小瓜の山とも寄るむか庵　水

礒つくくとさらきの庵　鶴

濃州いろ涌之部

慈月堂 佳玉

秋の月名ハ猶照せいつまでも

木草に悲れ涼く遠く露 素切

咲初る菓ハ出所替まてく 玉川

きりもしとまる小調布(デツチ) 呉竹

大工た宮おしふくて手はし 洞楷

構のおもとをゝ帆のゆく 岫雲

卯の花にわれで友寺富士の峰 挑雞

居くらこぬ之家の居中 鯨山

田舎町檀那寺紙も貴切て 可流

隅ゟ隅へ吹く其ゟ勢 川

月と見ふ花ハ抱まて山の尾ふ 雲

ぬすみ猫纏れ格子雑子鳴 楷

折廷のとろくハ奥へ卜おきゆ 山

石味をつみよせてふところ 玉

かいきゅの糸より細き切り蓮艾 竹

亭主の明日は大丸の錦かな　鯨
ちろれ梅茶會に眠らせて　川
いかり笠と呼へハ塩売　楢
夕月の出かゝりにさけなさけ　流
いろはにおとし冬の初秋　之
ハナ鳴ともぐく泊して流る了　山
勝を組ぐとも坦ハ月の也ヶ　流
正せよく成り其後清の花の庭へ　切

おほきし様の壺ハ小倍國　梅

尾州刈安發之部

八番

衣に川黄香や何とねりなん
風よまずしく雲れ之日月　可卜
安ふ○に出し丸杜と笑気　杜沂
吹ともつともに道の月我薫藪　蕉笠

もつくれ志まり付る垣ねまゝや　木旦

けふまでハ重も進付　東虹

夏くれ夜中の温泉の蔵ハ黄　梁父

かゝるれきりれ花おくれ比　沙角

清判として筆とるの功あまよ　有毛

伯母の隠居ハ蔵ハ出ても　一壺

ことあ瑠璃絵なへるなら聟の滝　鳴虎

和歌に紅入流行の舞　雷

侍合よ折目崩して月の宵　卜

小役の場をきりて鳴　沂

志ぐれは薬紫の旅に舟や　笠

かくてかゝる山の時雨　旦

雲を清く波くまで花の時　虹

御所もやの庭の女房　父

田螺見て捨ておもて縄りを　角

古塚としあり村の宵　毛

札書く中に実へて老子経　蚕
浪みて海鳥を繕て居ぬり　衣
まだ扇のあしまぬ株の持おり　扇
あくやとしはの虹の夕だち　卜
ほ所へ独するもし居し進　沂
定家にてする竹箆の下　笠
竹籠をさけとハ心えると　旦
あそこく立ところまで雇うて　虹

雪の月花表の前を松の皮　文
餅なりける川の小豆畑　角
梅の出代に牙帯持さずり　毛
牙根のえへする洗濯の糊　蚕
砥を珍を並て弄し蝸牛　衣
稽古の月日の不都竹刀　扇
香花をとりて施菜の切刻み　卜
世の中には喜なぎき　沂

同所

月影りいまだ雛色比塚のかげ　可卜

枕に秋の數々経なき別　八雷

冬近し燒影比の表摺らん　吟叔

縮緬（チリメン）おもきもの着て借上　有毛

洗ひ物がたまりて垢が浦ニケ　東虹

瀬にぬれ菜句の菖蒲挿く　木且

杜枝よ雨の白瓜を更かゝし　蕪笠

侘見の肩をとりまて朝兵　一笠

信嫁の妹が老も縁所なれ　梁文

雪のわらじに尻をとぬく着　沙角

旅枕ハ油ほし帯はほしき旅　杜済

根切り菜を切りに始せる嘉祝　卜

豆葉に古き乳房の洗ふて乗る　富

絶へ蛇くろし集て屋[illegible]　虔

降らせて三り濃い苦ることさハ　毛
加馬篭に酔する宵もなく婚　虹
兵雀こは都の西の月ノ寒　旦
蜩ともうらの園のやりらみ　笠
しとゝ森に夜待ちの面しろき　臺
所のうち出して見る雨酒　文
業麹に苔のさくさる〇の旅　自
一トきとゝるし鉄拐の峯　浙

財津風天文の図をとる秋もる　卜
つまりさ肩に女子の尤好　富
しり回にかゝる娘が恋あるき　泉
うちの兄うしろふる財布をく　毛
青葉の縁退ハ御家とし大根川　虹
たくさる夢後の延ひ無に如　旦
暮の月濃せ刹しに秋ともや　笠
風おゝまくに瀬する山しの声　臺

尺あらしも武蔵陸波の汐狩り　丈

かの笠先きる人ハ是も絵かな　角

月ハ薄く明眼院の鏡の菊　所

清志さうなる桜風呂の下に　卜

餘ありき垂れ芝の花一本　富

人を哀又喜しみて三月　虎

同九日市場之新

追善のゆるしを申して
乞ゆしをふ作

心ぼく〳〵此夕ぐれの兼好哉　八富

轉ひく〳〵のまゝ細紙三日月　梅風

姥が井戸敷の作家を捨とく　三井 雲岫

むかしをとうて汁の於とこ　山越 梅之

集りて市のわくりに噂すれ　一巴

半の郡くしまはつ大工岳　龟葉

被くとも會の此足知れぬ流連　宮氷

年條のやゝ谷姿の山櫻　竹子

一枝れ花やさしくも法の縁　里潮

藪ゝ草ゝ花れ咲きかな　可吟

同 花池邊之題

竹縁に我子日の草は花　八雷

梅咲や寒入の子張の頭　崇天

明康と友呼聲ぞ寒かりて　千石

月さと見えさせに垣に床まる　友子

投入との梅花あへぬさかし　崇天

こまやかにも水鳥の尾　池水

同 所

蓮の実れ飛ねぬ行事　崇天

氷見ゆるに鶴舞の露　千石

月ハやゝ入かたにほはれの暮もなし　池水

流にもしるへれ旅を示せす　素天

始しるや下もとふさのか花の縁なり　安子

葦の姫葉にかゝれさへはり　千石

年々句々を拾ふ

白川の関をも飛越る郭公　仙角

行水の袖もさえて氷なれ　扇招

すゝ細畑に立る案山子かな　寄水

むしゝ干や浮かみに叶ぬと　丞卜

翁笠の浮きにまかむ紅葉かな　二風

衣かけて弥ふに備る柳哉　杉岳

夏笠を翁菅の霊や蘭が竹　一知

翫まく拾ふもとると土用干　挿之

こま犬よ寄てはなしをきく夕立　宮笑

汁鍋にとんぼしこまる暑さ哉　之楓

あさかほや旦に花をかく咲　篁鳴

一二箒使を宝やむかしのまつり　鴎波

ちんと鳴ル耳や伽藍の暮れの雪　偃予

山越に霞見え向ふ孫娘　悠酔

土産には山伏すぐる新酒哉　杷牧

富士ハ越る箱根ハ渡て九月尽　松圭

むさしのを見てさびるや大関　巣竹

寝所につく子鶏もすり朧　宗扇

盆ハ白く月見てゆるさくら哉　吐竜

山吹のしづまるころ桜姉　楳来

玉川や覚てハ何をすみ臺　虎緑

十六夜の雲やさじらし峯の花　滄周

雪の瀬雪に川すや庵の松　地蠖

紅くて梅咲くや派遣文　布績

金家の絵馬をつりてや神まつり　杜月

初雪や法師の土産の臺子数　雋候

鹿の毛のわかりきるほとの夜寒哉　竹工

蜻ふくや終にとまらぬ草の末　里蝶

糸川の音に静の渡や白露の秋　秋石

古井戸のわかりわぬすき師走哉　携明

みか月や桔梗の下葉の露に仏　孤月

奈良合ゆちらしなし海月哉　有笑

わかりにくわからぬとき蜻蛉のかけ　重鹿

死るまで日々新てたりし百日紅　蛇橋

梅の香のかゝまよふて終に大桂　巴丁

様ありて乳母にちらしや出代り　青谿

春雨の作る新の声やあかつき　嵐然

柳土の中に暗く夜桂の跡　素白

蛸の声や入りて切ってゆく　井縁

寺の本の四方へ散る桜哉　旭扇子　牛山

大雪や程わかりみて岩戸の枕　野角

蝶蝶の糸のゆみや白露の秋　涼花

笹にも鶴の巻にかれそう　右角

春雨や下戸の辛れも酒の香　長志

梅柳のくらん濃ゟや春の雨　又猿

春待や蛙を前に井出のさと　呉蘭

垂と川車も见えで汐干かな　亭輌

童子泣く夢まさしくも宝の船　南川

夕暮ハ酒の香たかく桜哉　霞拾

蝙蝠の大き翼なり雛の花　然子

山吹や花の志あるの解すり　湖涼

雲乃山にきりく雲わりの白幣　壮林

夕立や綿のふしれさち池　竹巴

あられ色暮にありしやいちのほり　危卜

蘆の花や岸に行れの庵まで　登雉

みしらぬや寐覚ふ一川風の瀧　一雨篤

瀬の音や淀ゝにあまる春の雨　東芯

立寄りて来た磯ささがれ田螺かな　捉斐

猫八や山寺に仰ぐ風のかしこ　東玉

猿こゑや多喜越て聴る戸のさかり　河氷

飛む目の庵はやありて花の蝶　船象

角の草の笠さく人をみる道　色人　了大

芭蕉あり芭蕉へ是や風の雨　一笛
桜狩の京にかゝんで蛙かな　畢人
蕣ときゝたに休すや土竜　馬人
さそはれて鶯ハ湊の雨かな　湖学
寒の扇も出す時あり風のまゝ　東波
鳥の巣の破れ飛ハ中も清涼山　古川
ぬり笠にまぬかぬ物や篠の声　巨津
ふる枕顔の若りと鳴るかな　之竜
鶯や君咲しれ浪人の居　謝流

きさらの庭や吹寄の御すゝき　湖文
酒臭に形ち嗅忘れし大根川　之鳥
井の水に咲く梅ヶ香や浪遊子　泉之
かの風はまあ子待るの雛信濃　鼓了
初物の棚も中まぬ拾ひかな　己千
菊に来て草にくるやきさつまり　楚樵
むさしのもせきの経路の田螺かな　兎志
蚕ふ身に性根あり介朔の瀧　千朝
川水を竜骨車に吹く柳かな　蘇鳥

生板に水さす雨の名残かな　園水

支度もかり茶屋ハ閑かな　桃仲

其涼の宮井みすゝや木下闇　花翁

牛の尻伸馬の尻似るや春の雨　楠立

初秋や出かけの月に尾花根　海石

始旅に年もわりなかりし鳥　寿文

水の中におくに花柳かな　梅風

堂塔の中にぬくうき紫花なか　菰香

雉の浮下まいるり錦つき　之林

夜は乙子草の香ハ匂ひかな　白浩

夕影の風をしのぐ牡丹や袖の下　可考

病むみすに針の療治や啄木鳥　南太

ほのくせて笑と合まんしの花　名邨子

まじつて八棚に酒盛し花見かな　安成子

短夜の時をまつ花かな　竜帆

逢ふ手の春にぬ炒年かな　指月

夜所の猫も物わかれかな　大年　鯨里

水の音の寄に来ぬや木下闇　圃静

蕣の花やかゝる節迄さすもの垣　艸巾

萍蒔や田子の八重起富士の峰　風貴

若竹の神楽やゆくき大吹雪　挑圃

神垣の中川口切や修験やら　序孝

山おろし機なまるや奈加帳　女 白秋

拾残りし捨馬の気をさらす馬　枕流

蕎川て越来の何をあひろう　揮紫

足の青野に蔭の九定なるろ　六耶

若に地中の虫しれぐさきろ　鶏堂

深きくもりしを神なれ　碩路

打八浦しの吹しのさぬ飛そなれ　藤乃

浦麻の月を汲むや来すさき　捨石

若草やたゞぼゝしはり馬の乳く　白梵

所顔しるよ山えぞ麻の声　江州堅田 文叔

秋しれ枝を忘まてさ花なれ　同 可凡

猫の子の花の前を猪九胡蝶哉　同 湖声

蛤の気まり新をかふ小毎哉　同 汀雨

此垣の水も眼くや桐の花　同 柔竹

人声ハ浜まちくて霞かな　同　梅笑

舟のりを乞ふして一葉かな　同　蘆湖

氷るれ続くや湖上の橋　同　芳菊

満しほわするゝ時雨や沖の鴎　同　柏舟

泉からのりて破也て芙蓉かな　同　搗頭

雨うるれ色かけところや夕きつき　同　洞々

見るれ月れ余所へさし迎ふ夜寒哉　同　江雨

萱れ根や堅め藻みの月夜　草津　雅莚

擣ぬれ老をさそれや帰し花　大津　貞周舎

小町ゐの姥恋し郭公　同　任北

夕立やわきこめ越く渚ほ花　同　五瑳

露一夜氷せ放して蛍かな　同　馮功

糸瓜や那賀領の手のむせる程　同　巨舟

氷の影流るゝかるし夜神楽　同　巨候

森の露笠の辺紀那かな　同　文甫

立稲や猶よ足や紀の川　同　遊星

送り火や走ひまとき飛りけり　同　芝庭

まぎて吹ひまに行の鶴かな　同　露石

木枯やまとまりにけり麻の連見　同　倚山

葺麹や所庵の内外目の梅の月　同　咲人

境より落ちたるあまの落葉かな　同　蘆山

初雪や波にうちよせてつくづく　同　其尚

寒む月一輪みてり水ぎはし　同　古波

埋火やいつか冷えし夜の梅　同　呑路

夕暮は寂しき花かけにけり　同　松卜

いましがた出て入る人の桜かな　同　可明

若芦の穂や波の静まりを掃除かな　同　卜工

稲妻や一夢のこれ京その空　同　桃秀

明星を一所見て汐干かな　同　蛇布

蔵ひらくや夜川二階の表裏　和州郡山　蛙角

出るから八道走れすゑや近桜　越後高田　丁也

心にも手繋くりや請これかな　同　石芝

卯の花や寸も替らぬ物干場　同　呉行

蝉に飽く唐ところとて見舞かな　同　止三

辛崎をとりえてもみの実かな　同　東籬

稲妻や波くさ秋風の中ちるる　同　亮就

継て見よく又来飛るや二つ蝶し　同　花北

咲分の子よ見し先や勝鶯　同　胡友

余所に見る白車に明石の浦恋し　同　梅至

初雪ハ二夜てふる梅を探り道　江州金堂　寿月

去りしくハ雛よせ帯をほどしけり　同　萬鶴

秋風見る手や附ある花一枝　同　幻水

うつ伴の脊筋すらでしけの月　奥州野上　嘉本

萩うつて花むしろ風なれ　同　文杠

庭咲や仁王の筋のわきのたり　同　志水

灌仏の行列よ見れ晴れけり　同　双流

三千丸よ子よ岩花さいて行れ　同　席川

春の人よ猿の作しける林れ　同　奇水

初雪や霞のうちに帯れり見しい　同　五明

この蝶去て見よ隠れる山獄の音　同　渭舟

盆の庭を示し世の汲干れ　同　松舟

待くれ飛ぶよまうくすや雪佛　同　畔水

花の影や水にあつて小石川　同　井玉

秋のつれよ来てる席寄せてや子の市　同　梅風

永き夜に夢をとすゝめる火燵かな　同　里露

手枕やはらりに聴る吉野山　同　也素

春雨や庵つもりとの八石焼菴　同　射石

御堂にして恵心の仏は拝蟻かな　水谷亭　等舟

旅寝して婦のあゆみやなれ月　同閑邑　繁家

きぬくの旅に庭の火桶かな　同　湖舟

深きと出る文や鳥目の家を山　同　笠香

竹の子と剥や隣の忠太郎　同福嶋　之菊丹

其川室そやとを絶なふ年の暮　同　之岳

参りてこそ御婦の三條は汲千代　同女　玉川

落葉や市に踏下は能勢川　同七人　万る

淀泥や手もしの入れ流ひかく　同宮田村女文房　尹里

世ハかくて静さし柳の膝に　同青木村　可貞

梅をづれに梅とさやきのこ鶯　同深川　志香

施く飛てつき払りし秋の暮　同　柳渡

引那と後にさえてやまきの瓢　同伝春　花梁

大空は堺のわきさや椽の月　羽州河井　芳舟

草秋の八重に招くや山すゝき　平州名和　董雨

春雨や名所に見て廻る行衛かな　奥州信夫山葉　杉雨

竈焼りまだせんしぬ夜かな　同保原　亀云

立留と取出て見たり雛の巻　同　二川

文月雨や漂ふ旅の旅人なり　同　象舟

初若や清士の向押とつまて咲　同　杉徑

菜嵐の出く殊意のすじかな　同　橘子

清貫が手ま拝しくすみれかな　同　吐嵏

逃てく水振にとつてみし更梅　同掛田　桃村

涼んぜしくし悠哉ち春風　同　流之

名の木に絶ぬ紫や霊の原　同　仙舟

啞蟬の声と通りし桔かな　羽州小布沢　其山

滝壺に落て老命つきさかな　同　栖蟻

大形に力くらべし涼しかな　同　北惺

生ひしみ交きるいやとき牡丹　同　泉隣

りしかぬとに径や山さくら　同　湛篁

出つるて猪の鶏ぞる若代　同　栖帆

みりの雨や春石に添うろ梅の先き　同中小松　栖塘

あげさとてはれ夜へ蜻蛉かな　同　春洲

馬ハぬる牛ハのらく時雨かな　東武 風志

着れを取くや暮れ夕ちらくさ　同 其白

くれさみれ出るまて赴へ川すゞみ　同 絡堤

涼しさや蚊帳に風の何男波　同 花尺

くれ鳴ハ香ハ曇りなり雪れなき　奥州保原 令驥

志づり尾の稲をとりもおり雛合　遠州見付 羽人

香まみて砕を吹くる胡蝶哉　同 芝蘭

以ち上や然まにかゝる鹿の角　同 一囀

花ちの浅深くれ夢無きかな　同 對年

旅ちかや蚊帳に包む梅の花　同 蕉長

行連てまて神馬の姿や朧月　同 獅山

口説くくし恋まぎくれ礒かな　同 荻洲

無ひ路の月取ハ晴し枇杷の花　同 鯉江

該合の解ちたる月や積時雨　同 意気

時雨るしや月傘に寒く蝶の夢　同 蘭秀

横情に能りきむずしや松風の花　同 歌菱

さくらもと梅に盛るし角見忘　同 好鶯

村雨をとり面へわりとおちかれ　同 黄山

紙漉のこゑも朝川鳥の声　同七人　風士

庵涼し来る時雨る未隈の紋　常州　白扇

了今九佼遅ふそこそ逢はん哉　同　斗十

君のまゝ若葉の嶺に水出雲　同　花行

白豆に縁は十寸やま滝の松しく　同　咄之

鞍る姿月出るとものや猫の花　同　今文

徐心のありて寝てゐる花の哉　同　兎船

都の夜の風のよひも花あはれかな　同　雲吟

芳の畑のゆふすゞみ月の雛の声　尾州鳴海　蝶羅

雨雲の杉むらに蛍や御簾　勢州四日市　周行

帰の人はまひを告ふや大ふて　同　紀史

九年目に曉涼し初さぞ　同　境州

名井もし春にてさしうる紅葉哉　同　桂可

水つま若る人とも氷雛の声　同　千瓢

夕顔ハ入りに細（へに）ふ追はり　同　候和

ゆふ涼や堀る花の縁にゆくらし　同　里川

く川さ北まれ涼きはや芦の雛　同　丁竜

振袖のうこハ化しうる十月干　同　芳舟

むしろや涼し大名の刈わり　根翁

曲水となる川狩の夕かな　千友

狗わけて佛を見せよ[illegible]　丁浩

八束のおまりや謝田の蚊やり　尾州佐屋　吟山

娘ののう咲ふ凉筋や碇石山　巨枕

猫妻や八ヶ撲ける尾花しく　寄潮

梅か香の白に鋼や海の音　竹丈

猿まで以てくれ乞る夕　守枚

禅寺の数分て浮しや乞行　魯推

秋さびしさらば木魂にあなどり　卜之

銀杏の葉匂ひ挽くまくらかな　有涸

紅葉ふ見の岩まわぐるや生石鍋　三州岩津　象計

秋雨や油しみの傘に灰　携阿

筆のさうりや湯家のさらい論　代竜

植樹よ落て涼しく汗拭　鯨呂

渡り鳥渉り咲や小まへ原　霞丈

種の芽の秋風を盆の花火かな　濃州今須　素切

狂しよ古き新綿よ雨がほし　佳玉

海棠の枕をこすや鉋わらし　同　可流

むしろりの女やいづこ草の精　同　洞橋

柳影うつりて水迄子鮎哉　同　桃鯉

入日まわる名げハれし雛頭巻　同　玉川

くしれぬ朔（ツイタチ）を雨の柳かな　尾州犬山　琴流

石榴実の肩まで来るや赤つばき　同　花天

飛込んで泳ぎとまる沖の鵜　同　斧川

締くずれちるや袁屋の紙幟　同　馬嵐

牡丹の形かさる細代やけ月見　同　竜卜

夕涼や馬の息ふく夕月夜　北伊勢　鯨階

影揃ひ又落さぬ氷室哉　同　圓蓮

藤の花けれ中や後ちん留の足　同　達外

麦穂や柳落さて蛇牛　同　秋洞

待えて川柳おし御輿（ミベ）奥（ウラ）　同　丙星

紫陽花やとなげてらふむ糸　同　鵬州

葛水や樋ちる蓋す鎬の庭　同　一計

春雨や麻さまく油つぶてゆる　尾州前　八雷

今宵わも八石こもなづし七夕　同　可卜

尾陽竹女梵庵兼主
先師の七廻忌をとむらんと
集家人の言葉をあつめしに
あふかし（圓）の句を思ふに
是次師恩の大謝を述んとし
予に此集の題号をねかふとし
宛こて槐葉庵宣居士とかける
其の面目を換ハ花筆を
継て予か意に染むまゝ

寛延二年己巳
彌生日

湖南員月居士
松琵琶諧誌

誹諧書林
京寺町通二條上ル町
井筒屋庄兵衛板